

5月



平成28年4月26日  
佛敎大学附属幼稚園

## 声のゆりかご

園長 藤堂俊英

新緑の爽やかな季節を迎えます。小さい頃、この季節になると初物を食べるということだったので、よくエンドウやソラマメの豆むきを手伝いました。みどりのベルベットのようなさやの中は、豆にとってはゆりかごのようで、そっとやさしく取り出してあげたい気持ちになったものでした。豆のさやは牛を飼っているお家へ 持って行き、見上げる大きな牛さんの飼い桶に恐る恐る入れてあげたのを思い出します。

子どもたちにとっての特等席がお家の人の膝の上であるように、赤ちゃんにとってはお母さんの話しかける声のする腕の中が最高のゆりかごに違いありません。赤ちゃんは心地よい声のゆりかごの中で絶えず話しかけられ、暖かい声の世界の中に置かれます。そしてお腹がすいたとっては泣いてミルクを飲ませてもらい、おしめを替えてほしいとっては泣いて気持ちよくしてもらいます。赤ちゃんはそういう声による応答の中でこそ生きられるのだということを無意識のうちに感じるのでしょう。そこに家族の絆の、また人と人との交わりの芽があります。人の子が成長するそうした自然な姿をふまえて、児童文学者の松井直さんは、「いまの家庭での子どもの育ちのなかで、もっとも大切なことは、親が子どもの顔を見て、自分の声で語ることです。小学校の中学年までは特にそれが重要です」と、まなざしを添えた声の絆の大切さを語っておられます（『おおきなポケット』2000年4月）。次にあげるのは声のゆりかごの中で育った、或る東北の人たちのことを伝える黒木修さんの「風の声」という詩です。

岩手県大槌町に 古い電話ボックスがある いつの頃からか 電話をかけにくる人が増えてきた  
「お父さん、お母さん、お兄ちゃん、僕は元気です」と、伝える少年  
「おばあちゃん、孫たちは皆元気ですよ、大きくなりましたよ、逢いたいね」と、涙ながらに話す女性  
「学校の友達は何も元気だよ、また皆で遊ぼう」と、かわるがわる笑顔で話しかける少女たち  
今、生きている自分達の近況を伝えるに、電話線の無い電話ボックスを、口伝えで訪ねてくる  
電話の声は、春の穏やかな風が残らず運んで行く  
遥か彼方の海から、大空へと連れて逝かれた人々のもとへ  
風の声を守っている真っ白な電話ボックスの中では、真っ黒な電話機が大津波から四年たった今も残された人々の風の声を送るために、静かに待っている

たとえ顔を合わせて話をするができなくなってしまうと、声のゆりかごの中で育った私たちは、声の絆を忘れはしないことを、なお一層、声の絆を大切にしようとするのをこの詩は教えてくれています。